

「福音を伝える」ヒント集 カトリック 徳山教会 2020年11月 テント職人パウロから学ぶ

パウロは、使徒たちの中でも特別な存在です。ペトロたちのようには生前のイエス様を知りません。他の使徒たちが共同体の支援で生活していたのに対して、パウロは生活費を自分で稼いでいました。また、雄弁な姿だけでなく、地道に働く姿でも宣教をしていました。今回は、テント職人として苦勞しながら宣教したパウロから、私たちが職場で宣教するヒントを得たいと思います。(参考文献『天幕づくりパウロ—その伝道の社会的考察』R.F.ホック著 笠原義久訳 1990年 日本基督教団出版社)

○技術習得の背景

パウロが職業を持っていたことは、トーラー(律法)の学習と就業とを結びつけるラビ的慣習に倣ったものと考えられています。恐らくパウロ(サウロ)は、安息日と祭日を除いて父の職場で時を過ごしたのでしょう。つくられるテントは、ローマ軍の軍事活動用に使われたので、パウロ一族がローマ市民権を獲得した、とする説もあります。

技術を習得した理由がいくつか考えられます。

*13歳頃から父の元で徒弟としての生活を始めた。

*2~3年の修行の末に父親並の皮細工の技量を身につけた。

*皮細工の仕事は、道具の持ち運びが容易で移動に適したので自ら学んだ。

技術習得の経緯は諸説ありますが、テント職人の仕事場は一室確保すればよかったので、結果として移動の宣教に適していました。

○聖書箇所から

宣教旅行中、パウロが天幕づくりによって自ら生計を立てていたことが聖書箇所からわかります。どれも苦勞して働きながら宣教したパウロを想像させます。

「パウロはこの二人(アキラとプリスキラ)を訪ね、職業が同じであったので、彼らの家に住み込んで、一緒に仕事をした。その

職業はテント造りであった。」（使徒 18:2～3）

「兄弟たち、私たちの労苦と骨折りを覚えているでしょう。私たちは誰にも負担をかけまいとして、夜も昼も働きながら、神の福音をあなた方に宣べ伝えたのでした。」（1 テサ 2:9）

「わたしは、他人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。ご存知のように、わたしはこの手で、わたし自身のためにも、共にいた人々のためにも働いたのです。あなた方もこのように働いて弱い者を助けるように、また、主イエスご自身が『受けるより与える方が幸いである』と言われた言葉を思い出すようにと、わたしはいつも身をもって示してきました。（使徒 20:33～34）

「今の今までわたしたちは、飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦勞して自分の手で稼いでいます。侮辱されては祝福し、迫害されては耐え忍び、ののしられては優しい言葉を返しています。今に至るまで、わたしたちは世の屑、すべてのものの滓とされています」（1 コリ 4:11～13）

「わたしはそちらに3度目の訪問をしようと準備していますが、あなた方に負担はかけません。わたしが求めているのは、あなた方の持ち物ではなく、あなた方自身だからです。」（2 コリ 2:14）

「わたしはあなた方の魂のために大いに喜んで自分の持ち物を使い、自分自身を使い果たしもしよう。」（2 コリ 2:15）

「わたしが負担をかけなかったとしても、悪賢くて、あなた方からだまし取ったということになっています。」（2 コリ 2:16）

「パウロは、自費で借りた家に丸2年間住み・・・」（使徒書 28:30）の箇所から、人生の終わりに近いローマでの拘留中でさえ、パウ

ロは働いていたことが想像できます。

○どんな働き方だったか？

皮細工師の仕事は、自由な身分の仕事でしたが、教育のない者でも就け、体に良くない仕事と見なされていました。宣教先でパウロは、奴隷のように仕事台に身をかがめ、奴隷たちと並んで作業していました。実際の働き振りについては、「夜も昼も働きながら・・・」(1 テサ 2:9)とあります。日の出前から働き始め、日中殆んど働き続けていました。当時の文献から通常の職人が日中だけの労働時間だったことが推測できます。パウロは普通しない長時間労働をしていたのでしょう。待遇については、「飢え、渇き、着る物がなく、虐待され、身を寄せる所もなく、苦労して自分の手で稼いでいます。」(1 コリ 4:11~13)の聖書箇所にあるように、経済的に自立はしても、生活は厳しかったことが想像できます。

○働くパウロへの評価

聖書には、働くパウロが侮辱され、尊ばれなかったことが述べられています。「あなた方は尊敬されているが、私たちは侮辱されている。」(1 コリ 4:10~12)

その理由には、職業によるものがあつたと考えられます。なぜなら、当時、財産と地位があり、選択の自由がある者(自由人)ならば、パウロのような手仕事を選択しなかったからです。自由人に相応しい学芸の一つ(修辞学、哲学、政治学など)を教えて生活の足しにしたでしよう。だから、パウロがいくら骨身を惜しまず働いても、知識人からはそのような職種に就いていること自体で蔑まれていました。社会的に下層階級「帝政ローマ時代の職人階級」に位置づけられました。ある面、他の使徒たちと同様に共同体から経済的支援を受けていた方が評価は高かったかもしれません。けれども逆に、純朴な都市の貧困階級が喜んでパウロの話に耳を傾けます。なぜなら、苦労がわかっていたからです。パ

ウロの身近な話が共感を生み、話を聞く姿勢を作っていました。

○仕事と宣教の関係

「兄弟たち、私たちの労苦と骨折りを覚えているでしょう。わたしたちは、誰にも負担をかけまいとして、夜となく昼となく働きながら、神の福音をあなた方に宣べ伝えたのでした」(1テサ 2:9)

共に労苦した仕事場がもう 1 つのパウロの宣教の場でした。働く姿で宣教していました。身につけていたテント職人としての技術がパウロ独自の宣教スタイルを生みました。

パウロの仕事ぶりは当時の人々だけではなく、特別な才能がなく仕事をすることに私たちにも共感を与えます。私たちの日々の労働によって、神の計画が実現されることを教えてくれます。

○パウロの自由さ

パウロは、異邦人の宣教のリーダーとして尊敬されることもあれば、職人として貧しく暮らすこともできました。その自由さに倣いたいものです。

「私は、自分の置かれた境遇に満足することを習い覚えたのです。貧しく暮らすすべも、豊かに暮らすすべも知っています。満腹していても、空腹であっても、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を授かっています。」(フィリピ 4:12)

まとめ

私たちの多くは、キリスト教とは関係のない職場で働いています。そのような場所で宣教をするのが難しいと感じたり、諦めているかもしれません。直接、信仰に関わるのが言い出しにくいからです。けれども、そんな私たちにテント職人をしながら、福音を伝えたパウロは勇気を与えてくれます。作業仲間と同じ条件で、黙々と働く姿で「この人はどこか違う。何が源なんだろう？」と

奴隷たちは関心を持ったでしょう。

イエズス会に入会する前にわたしはプレハブ住宅の営業をしていました。あるお客様から「柴田さんの働き方に、宗教性を感じる。他の営業の方とは違っていました」と言われたことがあります。そう感じられた理由が何なのか、よくわかりませんが嬉しく感じました。周りの人がそう感じるチャンスが私たち一人一人に与えられてます。働く姿で宣教したパウロから勇気とヒントをもらいましょう。

振り返りの質問

Q. 働くパウロの姿を記した聖書箇所から何を感じましたか？

Q. 働く姿で宣教を意識したことがあるでしょうか？ 自分の職場で何を伝えているでしょうか？

Q. パウロの「公衆の面前での宣教（議論し教える姿）」と「働く姿での宣教」、どちらから何を学んでいるでしょうか？